

エポフ家と日本 (1)

系譜学的視座から見た日露交渉史

ガルキン・セルゲイ

1 系譜学研究の出発点

今から10年前(1998年)、母方の祖父の死がきっかけで、私は系譜学の研究に専心し生涯のライフワークとしてそれに取り組むことを決意した。つまり、先祖代々から受け継がれた貴重な情報を知る世代が次々とこの世を去り、調べるすべがなくなることに危機感を感じたのである。そこで、家系のルーツにまつわる記録を調べ、19世紀に活動した親類縁者の歴史を紐解いている時、1899年にサンクト・ペテルブルクで出版された『エポフ家』と題する非常に珍しい本に出会った。それは、エポフ一族の歴史を18世紀初頭から綴ったものである。そして、当時の人口が1万人足らずのネルチンスク地方で、主に農業や牧畜業に従事していたエポフ家の人々が、何故このような系譜の編纂を決めたのか、また、何故数千キロも離れたサンクト・ペテルブルクでそれを出版したのか、という疑問が湧いてきた。

こうして研究の動機は明白になったわけだが、いざ調査に着手してみると、早速難問に出くわすことになった。日本から一歩も出ないで、一体どうやったら有名な貴族でもないシベリアの一族の家系を研究することが出来るのだろうかという問題である。しかし、その難題を克服する手段は意外と身近なところにあった。この頃から急速に普及し始めたインターネットを使っての情報収集である。

「Эпов」の姓を検索エンジンで検索し、表示された情報一覧から不特定多数の人に研究依頼のメールを送る、という地道な作業で始まった私の研究は、たった10年の間にロシア中に数百人のネットワークを持つ本格的な系譜研究プロジェクトに発展した。その成果は、情報媒体として月間アクセス数3万件を超えるウェブサイトの構築、現地の研究協力者によるシベリア各地の古文書館調査、8625人分の家系図作成、そして調査旅行などの形で現れた。そこで、このような膨大なデータを得るにつれ、当時日露交渉史を専攻にしていたこともあり、8625人のエポフ家の人々のうち日本と関わりのあった人物は一体何人いたかという関心が生まれ、本研究を始めた次第である。

本稿では、こうした「系譜学的視座」というミクロのレベルで、知られていない日露交渉史の一面をできる限り掘り起こし、日本と何らかの関わりを持ったエポフ家の人々の生涯について精査し、彼らを取り巻いていた歴史的な背景の中で考察したいと思う。

2 エポフ家とは

まず、本論に入る前にエポフ家の出自について簡単に触れておきたい。エポフ家の歴史は古く16世紀半ばにまで遡り、一家に関する最も古い記述は1586年の公文書に見られる。同記録からは、エポフ家の初期の人々はシベリアとの交易で知られるヴォログダ県のヤレンスク村に居住し、農業に従事していたことが伺える。しかし、17世紀後半から度重なる農産物の不作で、当地域の農家は生活に窮し、土壌が肥沃であると伝えられていたザバイカルへの移住が相次いだ。そこで、エポフ家のシベリア移住の第一陣は、既に1650年頃に入植していたので、彼らを頼って他の親類縁者もこの頃からザバイカル地方へ移住していく。本稿で言及する人々の先祖に当た

るワシリー・エポフも最後の一人としてヤレンスク村を出発しており、シベリアを徒歩で横断し1720年頃にネルチンスクに到着している。

この地でしばらく大工として働いたワシリーは、地元の住民からネルチャ川の沿岸が豊饒な穀物の産地であると聞き、農業や牧畜業を始めるために川を遡り、ジュリジャ川との合流点近くに家を建てた。当時、村落の付近には広大な耕地があって、土壌が肥沃な上に水も豊富で、大麦や燕麦の栽培は最適であった。このような恵まれた場所に住みついたワシリー・エポフは、パン製造と牧畜で富を築き一代で豪農になった。

1760年頃、シベリアにおける身分制度が制定されると、ワシリー本人と5人の息子が当時の職業別に分かれ、それぞれ農民、コサック、商人、町人（小市民）として活躍していくことになる。そして、この生活形態はロシア革命により全ロシアが激変する時代にまで続くのである。

3 日本との関わり

さて、本論の主題であるエポフ家と日本との関わりはどのようなものであったのだろうか。そもそも、シベリアの地で生活していたエポフ家のような平民が、日本からの漂流民を除いて日本人と何らかの関係を持ち始めるのは、明治維新（1868年）以降のことである。維新後、日本からの移民が極東ロシアおよびシベリアに渡り始め、ウラジオストクを中心に、ハバロフスク、ニコラエフスク、ブラゴヴェシチェンスク、ネルチンスク、チタなどの地域に定住した。その数はピーク時で1万人を超え、ロシア人と日本人は今日一般的に想像されるよりも遥かに密接な関係を取り結んでいたことが分かる。また、このような交流は日常生活レベルのものであったことから、商業などの経済活動を通じて地元住民が日本人と接する機会を持ったことはまず間違いない。しかし、これを裏付ける資料の収集が大変難しく、残念ながらエポフ家に関するものはまだ見つかっていない。

次に、シベリアの住民（主に男性）と日本人が関わるようになるのは、1904年に勃発した日露戦争の時である。手元の資料で確認できる限り、エポフ家からは4人が徴兵され、満州での戦闘に参加している。但し、戦争は純粋な意味での交流とは言えないので、ここでは割愛しよう。実際、シベリアの人々と日本人との本格的な交流が始まるのは、日露戦争より十数年後、つまりロシア革命とそれに続く日本軍のシベリア出兵の時からである。

4 アタマン・セミョーノフの右腕 ゲオルギー・エポフのこと

ロシア革命直後の1918年、赤軍と白軍の闘争はロシア全土で熾烈になり、チェコ軍団救出を名目に日本軍がシベリアに出兵する。そして、同年の10月に日本軍はザバイカル地方の交通の要地であるチタを占拠し、当地で反革命政権を樹立すべく活動を開始していたアタマン・セミョーノフというコサック出身の大尉を支援し始める。彼の右腕として活躍したのが、これから紹介していくゲオルギー・エポフである。

ゲオルギーは1884年に農民出身のコサック兵の家庭に生まれ、1907年にオレンブルグ陸軍士官学校を卒業後、第一次世界大戦に従軍し、1916年にザバイカル・コサック軍のチタ方面連隊の連隊長に任命されるまで、機関銃隊の指揮を執る。1917年にザバイカルに戻ったゲオルギーは、一旦ボリシェヴィキによって投獄されるが、セミョーノフ軍のチタ到着とともに釈放され同軍に加わる。しかし、1920年後半に日本軍がザバイカル地方から撤退すると、極東共和国の人民革命軍の攻撃を受けたセミョーノフ軍は総崩れとなり、セミョーノフは飛行機で満州に逃亡してし



セミョーノフ軍が満州里で最初の旗揚げした時の部隊

まった。

そこでゲオルギーは極東地域に活動の拠点を移し、カルムィコフの率いるウスリー・コサック軍の一員となった。だが、この軍団も長くは続かなかった。ウスリー・コサックの解体後、エポフはスタルク提督に率いられた船団でウラジオストクから朝鮮の元山に避難し、1923年7月23日に長春に居を定めた。

それ以後、満州を本拠に日本の援助を受けた彼は反共のための諜報活動に従うことになる。

ここで興味深いのは、1923年に長崎に一時滞在していたセミョーノフの招聘でゲオルギーが来日していることである。私の手元にある資料から判断する限り、これがエポフ家出身者による最初の来日になる。また、関東軍との関係が深かったエポフは、1933年より関東軍参謀本部に勤務し、1935年からは長春白系露人事務局の局長を兼任している。そして、1945年8月にソ連が対日参戦して満州に進攻すると、セミョーノフとゲオルギーがソ連のスパイ取締りの特務機関によって逮捕され、前者はモスクワで絞首刑に処せられ、後者は懲役10年の刑を受け、強制収容所に送られることとなった。

5 満州を舞台とした交流

1920年後半にセミョーノフ軍がソ連軍に敗れて解体すると、夥しい数のコサック兵や知識人が亡命の道を選び、ザバイカル地方から満州に流入した。その数は10万人以上であったとも言われる。エポフ家出身者も200人近く満州へ渡り、哈爾濱（ハルビン）、牙克石市（ヤケーシ）、そして白軍の基地となっていた満州里に定住した。当時の満州は五族協和などの理念でも知られるように、様々な民族が居住する多民族地域であったので、日常生活レベルで考えれば、ここでもエポフ家の人々が日本人と接点を持っていたと言える。しかし、本格的な交流が始まるのは1932年以降、すなわち関東軍による満州国の建国後である。

この時期の注目すべき事実として紹介したいのは、「浅野隊」と称する白系ロシア人からなる部隊のことである。浅野隊とは対ソ工作を行う目的で、満州国軍の一環として1937年に設立され、陸軍中将浅野節の指揮下に置かれた特殊部隊である。この部隊には哈爾濱松花江部隊（兵員約250名）の他に、海拉爾（ハイラル）部隊（約150名）、横道河子（オウドウカシ）部隊（約50名）が存在し、海拉爾部隊の一部が日ソ開戦時に日本軍によって惨殺されたという事実もある。白系露人事務局の記録によれば、この浅野隊に徴兵されたエポフ家出身者は4人で、それぞれ1943年頃まで所属していたことが分かる。この中から特に興味深い兄弟のエピソードを織り交ぜながらももう少し浅野隊の歴史を紐解いていこう。

1945年7月、第二次世界大戦において日本軍が劣勢になる中、浅野隊が解散され、翌月にはソ連軍が満州に進攻する。その進攻時には、白系ロシア人の履歴を記した重要書類を保管する白系露人事務局が占拠されたことによって、膨大な資料が押収され、それを元に日本軍と関係のあったロシア人がソ連の特務機関によって残らず逮捕される。浅野隊にそれぞれ軍曹と見習士官として所属していた次男と三男のニコライ・エポフ（同姓同名）は、逮捕を免れないことを知ると、自ら当局に出頭することを決め、親類縁者と別れの挨拶を交わす。しかし、既に家族を持っていた兄のことを不憫に思った三男のニコライが、四男のインノケンティと相談して「なりすまし作

戦」をここで考えつく。つまり、浅野隊軍曹という肩書きを有する兄は絶対に当局の取調べを受けることから、同姓同名の弟ニコライが軍曹になりすまし、そして浅野隊と全く関わりのないインノケンティが名前を偽って浅野隊見習士官になるという自己犠牲的な作戦である。

当局に出頭したエポフ兄弟は予想通り拘束され、それぞれ懲役10年の刑に処せられ強制収容所に送られた。その後、収容中の四男インノケンティは23歳の若さで泥酔状態の看守に射殺され、そし



次男のニコライ



三男のニコライ

て三男ニコライは10年の刑期完了後、オムスクに移り住んで1994年に生涯を閉じた。兄弟の助けで逮捕を免れた次男のニコライは、1954年のフルシチョフ政権からの帰還命令と共にソ連国籍を取得し、カザフスタンなどでの未開拓地開墾に従事することを条件にソ連への帰国が許された。満州にいたエポフ家の人々も殆どこの時期に帰国しているが、中にはソ連国籍を拒否して、オーストラリアやアメリカなどに移住した人もいた。

ハバロフスクの貿易商の見た東アジア

A. ボグダーノフの回想録を中心に (1)

サヴェリエフ・イゴリ

II. 革命期

極東地域在住のロシア人の運命を大きく変えたのは、「ロシア革命」と呼ばれるボリシェヴィキのクーデターと内戦である。これまで沿海・アムール州の開拓のために力を尽くした人々は、共産党からの迫害を恐れ、母国を去り、海外で救いを求めることになった。ボグダーノフ家の長男ドミートリーと次男アレクセイもその道を選んだ。アレクセイ・ボグダーノフの回想録は、革命期の混乱や極東地域の状況を復元する貴重な資料である。

1920年のハバロフスクについて

アレクセイ・ボグダーノフの回想録には次のように書かれている。「ハバロフスクからウラジオストクまでの鉄道路線においては、日本軍が駐屯したことによって比較的治安が良かった。ゲリラは、たまに鉄道駅や小さな鉄橋を爆破したりしていたが、日本人はすぐそれを直していた。

ボリシェヴィキは、日本人を騙すために、議会を設立し、ゲリラは、自己を「ゼリョーニェ」（緑色の）¹¹と呼び、日本人にハバロフスクに入る許可を要求した¹²。

混乱に陥った極東ロシアの実業家は、ハルビンなどの海外の都市へ出始めた。

「ハバロフスクの住民は、同市の様々な活動が麻痺していることを受けて、少しづつウラジオストクとハルビンへ移り始めた。私もハルビンで企業を起こすことが可能であるかを調べるために8月末にハルビンへ渡った」¹³とアレクセイ・ボグダーノフが語っている。